

エレン・イエーガー

軌条 れあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年の名はエレン。彼は普通の人間でない事に疑問を感じていた。

彼は母親から、17歳の誕生日に大切な話があると言う事を聞く。月日は流れ、彼は
話を聞くことが出来るのだろうか?……

果たして、彼の待ち受ける運命は如何に!?

※本作品は未完となります。

目

次

第一話
第二話
第三話
第四話
第五話

21 16 12 5 1

第一話

俺は、普通の人間と違うかもしない……
いや、おかしい。

それだけじゃない、俺の家族には隠された秘密がある。
その秘密と言うのは、名前だ。
と言つてもファーストネームではない。

俺たちクルーガー家は代々、本当の苗字を隠して生きている。

その名は——

イエーガー

この名前を隠す理由はわからない。
だけど、母さんは必ずこの名前は絶対に喋つてはならないと言つていた。

そして、なぜ普通の人間と違うのかと思つたのは……

時々、同級生の首筋を噛もうとする衝動に駆られるからだ。

そうはいつても昔からその衝動にかられるわけではなかつた。

あれは、12歳の頃だつた――

当時、小学六年生の俺は授業で球技をしていた。

同級生「そつちにボール行くぞー!!」

エレン「わかつた！」

同級生がこちらにボールを蹴つた時、偶々相手のチームの女の子にぶつかつてしまつた。

痛みに耐え、腕をさすりながら目を開けると偶然彼女の首筋が目の前にあつた。うつすらと浮き出る血管……血液の流れや脈拍、健康状態が一瞬でわかつた。

全ての感覚が研ぎ澄まされて いた。
その時、ふと思つたんだ。

『噛みたい』

これだけ聞けばただの変態だが、これには続きがある。

俺の脳裏にこの娘の首筋を噛みちぎり、赤黒い何かを啜るところを今起きて いるかの如くフラツシユバツクした。

それが鮮血だとわかつた頃には俺の理性は飛んでしまつた。

滴る鮮血、ビクともしない彼女、叫ぶ同級生達

あの事が今でも忘れられない……

あれからかな……軽く人間を遠ざけるようになつたのは……

そのあと俺は、授業中にも関わらず校庭を飛び出してしまつた。

走つても走つても息は途切れなかつた。

そして、走りに走つた俺の行き着いた先は自宅だつた。

玄関を開け母さんを探した。

母さんはリビングにいた。

驚いた顔をして俺を見つめて、問い詰めた。

「学校はどうしたの？」

「……逃げてきた」

俺のその返事に母さんは肩を落とした。

そのあと、学校に連絡し事情を伝えた母さんは言つた。

「あなたが17歳になつたら話す事がある。だからそれまでは我慢してね」

あの時、母さんが何を言つているのか理解できなかつたが、今になつてわかる。

それは、人を噛もうとする衝動を我慢しろという事だつたのだ。

あれから5年経つた。

そして、明日が俺の17回目の誕生日

これが何を意味しているのかわかるはずだ。

今まで待ち焦がれていた、母さんの話が聞ける時がきたのだ。

とても待ち遠しい、今までその衝動を我慢していた甲斐があつた。

いつたいどんな話しするのだろうか、俺には到底予測できない。

明日に備えて寝るしよう。

第二話

翌日、カーテンの隙間から差し込む光に目が覚めた俺は、目覚ましを確認した。時刻は、7時25分だつた。

ベットから飛び起き、母さんのいる場所に向かつた。

階段を降りる途中、ソーセージの焼けるいい匂いが漂う。ここで俺は、自分が空腹なのに気づいた。

急いでいたのか、足早に階段を下りきり、ダイニングに向かつた。

ダイニングに着くと、キツチンで鼻歌を歌いながら、母さんはいつものように朝食を作つていた。

母さんは、俺の気配に気づいたのか、ゆっくりこちらに振り向き微笑みながら、挨拶してくれた

「おはよう、エレン」

「おはよ……」

寝起きに自信のない俺は、掠れた声で返事をした。

頭を搔きながら席に着く、朝食はいたつてシンプル。メニューは割愛させてもらうが、朝食は早めに終わらせて昼食をがつかり食べるのがドイツ人クオリティ

「さあ、早く食べて支度してね」

「……うん」

少しづつ、声の調子が戻ってきた。

早くメシを食おう……

あの話はいつするのだろうか……それとも約束を忘れてしまったのか？

いや、それは無い……

父さんがいなくなつてから、母さんはいつも俺に尽くしてくれた。

その家族を簡単に裏切るようなことはしないさー

そうやつて考え方をしていると、いつのまにか朝食を食べ終わっていた。
いけない、考え事に没頭しすぎてしまった。

制服に着替えなければ

と言うのも、アレ以来不登校になつたわけでは無い。

母さんの助けもあり、1週間休んでから気持ちが落ち着いて再び学校に行けるようになつた。

定期的にその衝動に駆られることがあるが、その時はなんとか耐えていた。
それからは、自分の夢を目指すため高校に進学した。

極力友達を作らないように気をつけてはいたがそうはいかなかつた。
なんだか、人に寄り付かれる体质なのだろうか……

まあ、そんな話はどうでも良い

制服に着替え終わり、鞄の中の荷物を確認する

荷物はそこまで無いが念の為だ。

荷物の確認を終え、玄関に向かい革靴を履いた。
この靴は窮屈であまり好まないのだが、規定なのでしようがない
そして、最後に母さんに言つた

「行つて来ます」

「行つてらつしやい」

そう言つて玄関扉を開け、学校へ向かつた――

――学校へ行く道すがら、俺は自分の人生を思い返していた。

先ほど話していた父さんの話を思い出してしまつたからだ。

父さんは俺が5歳の頃に何処かへ行つてしまつた。

どうしてかはわからない。

母さんは、いつも俺に笑顔を見せていたが、時折部屋にこもつてすり泣いている時期があつた。

俺は、父さんを憎んでいるかどうかはわからない。

なぜ、出て行つたのか聞きたいこともたくさんあるけど、どこにいるかわからないし、どつかで再婚しているかもしれない、もしかしたらのたれ死んでいるかも

兎も角、俺にとつて父さんはどうでも良い事だつた。

いつも通りボケーツと歩き、学校へ行く道の中間に差し掛かつたところに、いつも聴き慣れている透き通つた綺麗な声だが、朝に弱い俺には億劫なほど大きな声が俺を呼んだ。おそらくアイツだろう

「エレン、おつはよー!!」

「んだよ……朝っぱらから騒がしいな……」

そう、何を隠そそうこいつは俺の親友のクリスタだ。

親友と呼んでいいか分からぬが付き合いは長い。

学校ではファンクラブもあると言うほど人気があるらしい。その理由は、よそから聞いた話によると美人で可愛い上に頭脳明晰おまけに運動神経抜群で優しいからだそう。

あれだ、いわゆる才色兼備ってやつだな。

でも、こいつといふといつも白い目で見られる気がしなくも無い。

まあ、気の仕方ないか

同級生とは、悪い意味で仲良くしているしね。

「エレンつてば！聞いてる？」

「ああ……聞いてる聞いてる」

俺は耳をほじくりながら素っ気なく返した。

「むー!!絶対に聞いてなかつたでしょ!!」

クリスタはほおを膨らまして怒っているようだ、俺にはどうでも良いけどな……ああ

寝
み
い

「今度、クラスの打ち上げやるって言つたじゃん!!」

ああ、確かにそんな話もあつたつけな

俺自身、そこまで感情が薄いわけでは無いと思う
可能ならば、俺だつてはつちやけたいし友人と仲良くしたい……だけど、あれを思い
返すたびに……

思い出す内に急激な喉の渴きが襲い

俺は唾をゴクリと呑み込んだ。

この感覚は……そうだ。あの時と同じように血を欲する時のことだ!!
くッ……！

なぜこんな時に……!!

意識が朦朧とし、過呼吸になつてしまふ。

全身の脱力により、歩道で倒れこむ俺にクリスタは声をかけてくれた。

「どうしたの大丈夫!?」

ああ……喉が……渴く……

「ねえ、エレーナ

」

」

キヤツ！」

心配する彼女を俺は人目のない路地裏に押し倒して、首筋を掴んだ。
まるである時のようになっての感覚が、研ぎ澄まされていた。

ここでは、エレンが優勢だったクリスタの生死を握っているのは彼だったからだ。
心の中に居るもう1人の俺が囁いた、すぐそばにいるように耳元から
『苦しみもがけ、このまま干からびるまでこいつの血液を飲み干せ!!』

「ぐ……や……め」

必死の抵抗も虚しく、俺の意識が消えたのは言うまでも無いだろう
暗闇の中でもがき苦しんだ……これで……おしまいだ……なにもかも
もう……いいんだ……

第三話

「う、うーん」

目がさめると、辺り一面に広がる空……の横に何やら物体が……
「あつ！ ようやく目が覚めた！」

その物体と言うのは、クリスタだつた。

辺りを見回すと、どうやら俺は公園のベンチで寝ていた。

ふと気が付いた、頭に柔らかい感触が……そういえばなんである位置にクリスタがいるんだ？

ん？

「うおおおつふう」

俺は変な叫びを発して、飛び起きた

何故つて？ 当たり前だろう、俺はクリスタに膝枕されていたんだ。
うん……

クリスタに……膝枕

「え、急にどうしたの！」

急にどうしたの、と言われても……

？……待てよ……記憶が曖昧で所々飛んでんだが……氣絶する前の最後の記憶が…… ク、クリスタを押し倒しているんだが……や、やばくないか!?
一応、クリスタに聞いてみるか……いやダメだ！

「ねえ、さつきから変だよ？ 突然倒れるしさ？」

突然倒れた……？ それは一体どういう事なんだ？
もどかしさを感じた俺は思わず口に出した。

「なあ……クリスタ、なんで俺はお前に膝枕されてたんだ？」

「なんでつて？ エレンが突然気を失つたから寝かせただけだよ？」

氣を失つた……のか

あれはただの夢だつたのか、ひとまず安心だ。

そう安心するのもつかの間、学校のチャイムが微かに聞こえてしまつたのだ。

「やばいよエレン！遅刻しちゃった！急がないと！」

「お、おう！急ぐぞクリスタ！」

俺は一体、どんだけ気絶してたんだ――

――全速力で走った俺とクリスタは、なんとか学校に着き事無きを得るが、授業中に何故か脇腹が急激に痛み出したことにより、今は保健室にいる

痛い……

何故かはわからないが、痛いのだ。

俺が公園で目覚めた時から痛みはあった。その時は普通に一時的なものだと思い、気にする事なく学校へ向かい授業を受けた。

それが学校に着いた時から痛みが増し、授業中には声を出すほどに腹を抱えて悶えている俺を見兼ねたクリスタが保健室に連れてきてくれたのだ。

今は、応急処置をしている所だがどうやら、脇腹に癌ができるていた。

変な所に癌ができるものだな……と、この頃の俺は能天気に考えていた。

ふとクリスタの方を見ると、胸の位置で手をぎゅっと握りしめている。

「お前、先に戻つてろよ」

「ふえつ!?ご、ご、ごめん、エレンが心配でつい……」

クリスタは俺の声を聞くまで、先ほどまで集中していたかのような驚きを見せている。

しかし、保険の教師に諭されたクリスタは渋々、教室に帰つていったのだった。

「あなた、良いお友達を持っているのね」

「あ、どうも」

保険の教師に俯きながら素っ気なく返した。

俺は友達とは距離を置くつもりだが、本心では仲良くしたいと思っていた。その感情が混同してよくわからなくなつた。

こうして、処置を終えた俺は教室に戻つたのだった。

第四話

保健室での手当を終えた俺は、教室に向かう途中で誰かの声が聞こえた。

「——レン——た——て」

おそらく幻聴だろう。

「エレン……助けて……」
そう思つたが、その声は尚も続く。

これは……ただ事ではないな……

俺はふとある事に気づいた。

この特徴のある声、これは

母さんの声だ！

これは大変な事なのではないのか……
確証はないが、妙な胸騒ぎがする。

心臓の動悸が止まらない……

急がなければ、そう思つた俺は教室へ向かう反対の方向へ向き走つた。学校を出ると、いつもの通学路に通り過ぎる人々、いつもの平和な日常だ。母さんはいつもの様に家で家事をこなしているはずだ！
きつとそうに決まつてゐる！

しかし、謎の焦燥感が俺をさらに緊張させてゐる。
いつもなら息切れしないはずだが、不思議とこの時は息が切れていた。
何故だろう、この感覚は……俺が普通だつた時の感覚だ。
急いで走り、次の角を曲がつたところにはいつもの家が――

玄関前についたが、扉が少し空いていた。

急いで家の中に入ると、母さんは居間にいた。

しかし、いつもと違うのは……血を流して倒れている事だつた。

母さんの顔はうつすら白がかつており、血の気が無いようだ。

急いで母さんの元へ駆け寄ると、まだ微かに息があった。
急いで救急車を呼ばねば、そう思つた俺は携帯を出す。

すると、母さんはゆっくり瞼を開いた。

虚ろな目をしていて、今にも消えてしまいそうな光がわずかに残つている。

重い口を開き、今にも消えそうなほどかすれた声で母さんは言つた。

「エ……レン……早く……早く逃げて……」

震える手で俺の手を握る。

その手はとても冷たく、ほんのりあたたかい。

「彼らが……来る……だから、早く逃げなさい……しばらく身を隠すのよ……」

「嫌だ、母さんを置いていけない！」

頭ではわかつていた。母さんは助からないと。しかし、口から出た言葉はこれだつた。

「エレン……見れば分かるでしょ……私はもう——」

「ここで母さんの目の光が消えてしまった。

ロウソクの火のように息を吹きかけ、消えてしまうように……

「母さん……嘘だろ……」

俺が物思いにふけっていると、後ろから物音がした。

急いで振り返りと、ペストマスクをつけた何者かが、手に持っている鈍器をふりかざそうとしていたのだった。

これはもう避け切れない、このまま当たりどころが悪ければポツクリ逝ってしまうだろう。

そう思った瞬間、視界の横からによろつと何者かの足がそのマスク野郎の顔面に直撃したのだつた。

ペスト野郎の悲痛な叫び声が聞こえたが、マスクを被つている所為で、あまり良く聞き取れなかつた。

ぼーっとする俺を透き通つた綺麗な声が俺を呼んだ。

「エレン、早く逃げるよ！」

そいつの顔を見る間も無く、腕を掴まれ思うがままに引っ張られる。

今まで住んでいた家が遠のく、俺は腕を伸ばし掴みかけるが、ペスト野郎が顔を抑え

ながら迫ってきたのだつた。

急いで走り、ふと手を掴んだ奴の顔を見た。
そいつはクリスタだつた。

「クリスタ、お前だつたのか……」

すると、クリスタは振り返りもせず答えた
「話は後、それに……私の名前はヒストリアよ
ヒストリア……だつて？」

第五話

活気のある商店街の裏路地。

そこは、表の世界の活気もなく人気もない。

狭い道を走り抜けると、小さな空間のある場所についた。

そこには、工事などに使われたであろう資材や道具が乱雑に置かれていた。
クリスタはこんなところに来て何をしようつて言うんだ？

この疑問は、この後のクリスタの行動によつて解消された。

乱雑に置かれた資材をどかすと、そこにはマンホールがあつた。

おもむろにマンホールの蓋を開けると、クリスタはそのまま梯子を伝つて降りた。

「ちょっと、待てよ！」

クリスタは返事をしなかつた。

マンホールの中を降りていくのに抵抗はあつたが、このままで置いて行かれそくな

雰囲気だ。

我慢して降りるしかないだろう……

降りるたびに増していく汚臭。

ふつうは耐えられないだろう。

ふとクリスタのほうを見ると、そこまで臭いを気にしていない様子だつた。大抵は、嫌がるのによく我慢できるな……と感心する俺。

梯子を上りきると、汚臭まみれの下水道にたどり着いた。

クリスタはさつきから口を開いていない。

いくら話しかけていても、無視してくる。

今のところ、あのペスト野郎もおつてくる気配は無い。

以前は鬱陶しいくらいに話しかけてきたクリスタ。

そんな彼女にどこか心の拠り所として接していたのかもしれない。

クリスタは迷路のように入り組んだ下水道を歩き続けているが、どこに行こうとしているのか全く見当がつかない――

下水道を歩き始めてから、10分はたつただろう。

いまだに歩き続いている…そう思つた時、クリスタの歩みが止まつた。

クリスタが止まつた目の前には、扉があつた。

クリスタが扉をたたくと、扉の一か所に隙間が空いて誰かの目が見えた。扉の向こう側から鍵を外す音がして、髭面の酒臭いオヤジが出迎えてくれた。

「よお、ヒストリアちゃんじやねえか！元気にしてたか？」

「なんだ、このおつさんは……何やら視線がこちらに

「そこのお連れさんは……もしかしてコレ？」

と小指を立てて示してくるオヤジ、一体いつの時代なんだかと呆れてしまつたが、クリスタ……いや、ヒストリアはどうやら適当にあしらつていた。

「そんなんじやないって、グリシャさんの息子さん……」

「お、おい、そりや本当か……!?」

ボソボソと小声で話していたが、確かに聞こえた—グリシャ—

そうだ、親父の名前だ。

コイツらは親父を知っているのか……!?

だとしたら親父が今どこで何をしているのか……いや、もういいんだ。親父の事は

……

—嘘だ本当は親父の行方を知りたいくせに……—

「ま、まあ、取り敢えず入つて来いよ。そつちの臭いは耐え難いからな」

ガツハツハと笑いながら、場の空気をよくしてくれたオヤジに心の中で感謝し扉をくぐつたのだつた。